

「3月11日」

釜石大槌地区行政事務組合釜石消防署

消防司令補 金野 悟

この度の東日本大震災におきまして、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご遺族に対し、深く哀悼の意を表します。また、被害に遭われた皆様に心からお見舞い申し上げます。

各地はまだまだ大変な状況の中ではありますが、被災地の一日も早い復興を強く願いながら、一消防人として果たせる役割を担っていく所存です。

2011年3月11日14時46分頃、私は外勤先の小さな漁村の水利調査を同僚2名と行っていました。突然大きな横揺れが起こり、立っていれないような状態になりました。横揺れは収まるどころかさらに大きくなり、持っていた携帯電話の緊急地震速報がけたたましく鳴ります。

目の前に建っている2階建ての家が大きくグラグラと横に揺れています。中には老夫婦が動くことができず、ただ呆然とコタツに居るだけで、嫁と思われる女性が倒れそうな仏壇を必死に抑えている光景が目に入りました。

我々は急いで家の中に入り、老人夫婦を外に出し、仏壇を固定し、集まってきた住民に津波が来る可能性があることを伝え、すぐに高台へ避難するよう指示し、私は消防無線で今後の活動について本部へ確認したところ、周辺住民へ大津波警報発令による避難指示の広報をしながら一旦、消防署へ帰署されたいとのことでした。

我々は海岸沿いに続く狭隘な道路を周辺住民に広報しながら帰署していました。ラジオからは大津波が襲来する恐れがあると流れています。ただ、道路は法面や道路に亀裂や崩落等も特に無く、道路から見える海や町並みも普段と何ら変わらず、ただ高台へと避難する住民が急ぐわけでもなく、ゆっくりと歩いている姿が見られます。これが数十分後にはこの世の物とは思えない地獄絵図になるとはこの時点で誰に想像ができたでしょうか…。

我々が市街地まで来たとき、道路はすでに渋滞が発生し、交通機関は麻痺していました。交差点にさしかかったとき、ふと私が右側に延びる道路先の堤防に目をやると、津波が水門を超えているのが目に入りました。道路左側の歩道にはまだ津波に気づかず、歩いて避難している住民がいます。私は車載のマイクで急いで避難するよう呼びかけました。

我々は、この状況を本部に連絡しようとするも、無線が混信し、連絡できません。幸いにも消防署近くの橋には津波がまだ来ていませんが、いずれ消防署周辺にも津波が襲来す

るのは時間の問題なのがかかります。我々は急いで消防署へ戻りました。

消防署へ到着し、ドアを開け車から降りると同時に消防署の中から署員が一斉に外へ出てきました。私が「津波が間もなくここにも来そうです！」と告げると上司は「各自担当の者は車を避難させろ！」と指示し、私は機関担当の者に車を転回させ、避難するべく車を発進させました。まもなく交差点に差し掛かり、左側に伸びる道路の先に目をやるとそこにはすでに津波が川から溢れ、道路全体を凄い勢いで乗用車数台をもみくちゃに飲み込みながら、迫ってきていました。

左側に広がる地域は河川と隣接していることから避難は困難であると考え、次の交差点を右に車を走らせました。右に続く道路は釜石市のまさにメイン道路であり、商店街が両側に並び、直線上に伸びる道路になっています。河川からは離れるため、津波の被害はまだ及んでいないだろうと考え車を走らせました。すると真っ直ぐ続く道路の先にこちらに迫ってくる大きな建物が見えました。我々は目を疑いました。大きな2階建の家が津波に流され、道路の真ん中を凄い勢いでこちらに迫ってくるのです。

私は機関員に車を停止させ、乗車している者に近くの高台の津波避難場所へ避難するよう指示しました。車から降り、周りを見ると車が渋滞しています。我々の後から避難した消防車も立往生しています。私は付近の住民等に津波が迫っていることから早く高台へ避難するよう指示しながら高台へと急ぎました。

その高台は、石段が200段位続き、上方が広場になっている「薬師公園」と言われる公園で、釜石市の津波避難場所に指定されています。我々がこの薬師公園入り口に着くと階段を数段上がったところに多数の避難者がいました。私が後ろを振り返ると津波が上り口付近まで迫っており、同僚が腰まで水に浸かっているのが見えました。我々は同僚を引き上げ、さらに津波の勢いが増してくるのが予想されることから付近にいる避難者をさらに上方へ上がるよう促しました。避難者は近くの工場等から避難してきた者はすでに上方に避難しており、階段上り口に避難している者は高齢者が大多数で中には車イスに乗っている者も見られます。

私は周囲の方々にも高齢者の上方への移動を手伝ってもらい、最上部の広場へ移動しました。署員の中には高齢者をおんぶして上がる者もいます。階段から眼下に広がる光景はまさに今までに見たことも無い光景でした。黒くうねりをあげて流れてくる津波にさっきまで乗っていた消防車や他の車がまるでおもちゃのように流れています。

車と車の「ガツン、ガツン」とぶつかる音、水没による電気系統がショートしたと思われる車のクラクションの音があちこちから聞こえます。さらに階段を上がる避難者の泣き叫ぶ声…。

私達は夢中で広場を目指して階段を上りました。広場に到着するとそこにはすでに200人位の人達が避難していました。作業着姿の人、スーツ姿の人、近くの保育園から避難してきた子供達等皆が眼下を望見していました。そこには一様に不安な顔をして現実とは受け入れられないままで呆然と立ち尽くすだけの人達がありました。

我々は下の水没した場所に逃げ遅れた男性がいるとの情報を得て、救助に向かいました。男性は右手を水面に出し、首近くまで水に浸かっています。顔面は出血により真っ赤になっています。我々は津波の第二波の襲来の恐怖との板挟みに遭いながらも男性の救助を行いました。近くにあった物干し竿につかまるように男性に声をかけるも男性は寒さと津波に遭遇した恐怖からか物干し竿になかなか掴まることができません。「早くこの竿に掴まれー！」大きな声で男性に声をかけ、我々の祈るような気持ちに男性はやっとの思いで棒に掴まりました。男性を引き上げ、近くの病院へ搬送すると今度は近くの駐車場に逃げ遅れ者が数名いるとの情報を得ます。駐車場と我々のいる場所は2メートル近く離れており、近くにあったアルミ製のはしごをかけ、署員を渡し、一人ずつ救助を行い4名を救助しました。

周辺での救助活動を終え、我々は消防本部から釜石市役所に設置された災害対策本部へ2名が出向との命令を受け、私は同僚1名と向かいました。普段であれば、徒歩で15分位で着く場所へ、獣道のような山を越えて向いました。途中、煙が上がっている場所の脇を通過すると付近住民から「あんたら消防の人だろ。あそこが火事だぞ。何とかしろよ。」と言われるもそこは瓦礫の山でまだ津波が襲来しており、近づくこともできません。

「すいません。今の私達には何もできません。」と言うことしかできませんでした。

私達は釜石市役所に到着すると、すでに辺りは薄暗くなってきており、時計を見ると1時間30分位かかって歩いてきました。市役所の中では職員が集まっており、慌しく動いています。私達は担当課に接触すると携帯無線機が無く、消防本部との連絡手段や情報収集ができていないとのことでした。もちろん携帯電話は繋がりません。私達は先程歩いている途中に避難所になっている寺に待機していた消防団車両のことを思い出し、避難所の状況確認と併せて携帯無線機を借用するため寺に向かいました。

寺に到着すると境内、中にすでに100人以上の避難者で廊下にも避難者が溢れている状態でした。残念ながら消防団の携帯無線機は津波に流されたとのことと借用することはできません。我々が移動しようとする時寺に避難していた看護師から避難者の中に糖尿病の患者が3名いて使用する薬がないとのことでした。私は車載の無線機で消防本部と連絡を取り、さらに直近の病院と連絡を取り、病院へ歩いて薬を取りに向かいました。

病院に着くと医師から使用する薬の説明が行われ、薬を渡され、山間の道を戻ります。

寺に着くと患者らは一様に安堵の表情を浮かべます。私は今でもあの時の患者の表情が忘れられません。

すると今度は、別の看護師から予定日を過ぎた妊婦がいるから、先程行ってきた病院と連絡をとってほしいとのことでした。私は先程同様に病院と連絡を取り、医師に直接こちらに向かってもらうことにしました。暗闇の中を10名ほどの関係者が30分位かけて歩いて来ました。医師の診察により今すぐに産まれる状態では無いとのことから私達一同は安堵の表情を浮かべました。

我々はもう一度、市役所へ引き返し到着すると、今度は津波により発生した建物火災が延焼中で隣接する山林へ延焼拡大の恐れがあるという情報を得ました。一刻も早く消火しなければ、近くにある避難所も危険に晒されます。先程の寺に待機中の消防団の車両を津波により限られた範囲内で移動、水利部署させ、消防ホースを展長させました。しかし、消防団のホースのみでは現場まで届きません。我々は消防署に待機している職員に連絡を取り不足分のホースを持ってきてもらいました。職員はホースを持ち、瓦礫の上をよじ登り、泥の中を掻き分けながら何とか現場に到着しました。その日は、全くの無風で町の中は停電により明かりが無く、異様な静寂さがある夜でした。その中で建物が燃え上がり、直上に昇る炎の明かりの中での活動となりました。

我々は限られた防火水槽の水を有効的に使用し、放水活動を実施、その後鎮火に至りました。やっと休憩したときには時計はすでに朝4時を回っていました。

その後、自衛隊、緊急援助隊が全国から釜石市に入って活動してくれました。緊急援助隊の車両が釜石市の道路を連なって入って来たあの光景は今も脳裏に焼きついて忘れることはできません。

私自身、自宅が全壊し、自家用車も流されました。義理の母も津波に流され、今現在も行方不明のままです。しかし、我々はこのまま災害に屈するわけにはいきません。私は改めて市民の生命、財産を守るという消防の崇高な使命を感じ、この災害現場での活動を他の職員や今後入職してくる職員に伝え、消防職員と釜石市民が一丸となり、災害に立ち向かっていける強い街づくりに、日々邁進していきたいと思います。